

石川英輔

大江戸仙境録



石川英輔

大江戸仙境録



講談社

大江戸仙境録

定価 一二〇〇円

第1刷発行 昭和61年11月5日

著者 石川英輔

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© EISUKE ISHIKAWA 1986 Printed in Japan

ISBN4-06-203051-9 (0)

(文2)

大江戸仙境録

目次

新 水 本 士 医 弓 芳 稻  
宿 所 所 師 弓 町 稻  
目  
次

113 98 79 63 49 37 22 7

あ  
と  
が  
き

流 手 女 紅 農 在 秋  
術 葉 所 秋

225 214 195 183 167 155 145 131

装画／熊田正男  
装幀／小松桂士朗

大江戶仙境錄



## 稲

窓の外には、爽やかな光があふれていた。明日から十月だ。長雨も終って、一年中で一番好きな季節が始まっていたが、私は、それを横目で見ながらワードプロセッサのキーを叩き続けていた。

文筆家は、自由業ということになっているけれど、実際はいつも原稿の締切りに追われていて、この職業に転向する前のサラリーマン時代の方が、自由になる時間はるかに多かったような気がする。そうかといって私のように地味な科学評論家では、締切りに追われる程度に

仕事がないと、生活して行けないのだ。

自分から選んで入った道だから、今さら不平をいうつもりはないが、一年中に何日もないような爽快な日ぐらひは、せめてのんびりと外を散歩したかった。

原稿の進行が、予定よりいくらか遅れていたの、私は昼食抜きでキーを叩き続けた。おかげで、約束の一時半に編集者が来た時には、二度目の読み直しも終りかけていた。

急いでいるらしい編集者が、原稿を鞆に入れてそくさと帰って行くのを見送ると、私は、さすがにほっとして立上があった。昨日からはとんど体を動かしていないので、大して腹は減っていなかったし、支度をするのも面倒だったの、外で軽くそばでも食べて来ようと思ったのだ。ついでに、夕食の買物も済ませて来れば一挙両得だ。

妻の流子（かづこ）は、大手の出版社で雑誌の編集者をしているので、昼間は家にいない。それに、今は校了前の忙しい最中なので、夕食の支度も私が半分以上やっておく習慣になっていた。

着替えをすると、私はいくばくかの金をポケットに入れて、マンションの3DKの部屋を出た。エレベーター

で一階へ降り、いつもの習慣で郵便受けをのぞく。午前中に配達された郵便物が何通か入っていた。どうでもいいようなダイレクトメールの下に白い封書が見えた。取出して見ると、切手も貼ってなければ住所も書いてない。ただ、〈速見洋介さま〉と、私の名前だけが封筒の中央に毛筆で書いてあった。郵便局を通さずに誰かが直接入れて行つたのに違いない。

何気なくその封書を裏返して差出人の名前を見た私は、自分の目を疑つた。そこには、あて書きと同じ流れるような筆跡で、〈芳町 いな吉〉とだけ小さく書いてあったのだ。

「まさか……」

私は、思わず大きく息を吸ってからつぶやいた。何かの間違ひではないかと思つて、もう一度、表のあて書きを見直してから裏返したが、書いてある文字が変るはずもない。

私は、しっかりと厚手の和紙の封筒を、その場でかなり荒っぽく開封した。中には巻紙が入っていた。拡げて見ると、明らかに封筒のあて書きと同じ筆跡で、手紙らしい文章が書いてあったが、古風な変体かななので、ちよつと見ただけでは何を書いてあるのかわからない。

私は、そのままエレベーターへ引返した。散歩や昼食のことなど、完全に頭から消え失せていた

エレベーターの扉が閉じて動き出すと、私は、改めてその手紙にざつと目を通した。かつて、古い文書を読む必要があつて少し勉強したことがあるため、少しは変体かなを読むことができたが、拾い読みするのがやつとという程度だった。とても、気軽に立ち読みするほどの読解能力はなかった。

書齋へ戻つた私は、巻紙を机の上に伸ばすと、あまり長文ではないその手紙の文字を一字ずつ読んだ。

『あれよりは御おとづれもたへ／＼に打過ぎまゐらせ候しだいに御さむさにむかひ候へども、いよ／＼御機嫌よく御いらせあそばし候や こなたも息災にをりまゐらせ候まゝ、御心もじやすくおぼしめし下さるべく候ぜ ひ／＼お目にかかりたく候へども仙境と俗界とのへだて 海山よりふかくけはしく、一入／＼こがれをり申し候 このふみまことに御てもとにとどいたれば、何とぞ／＼たとへ一筆なりとても御へんじたまはりたくござ候

あら／＼一筆申上参らせ候

かしこ

閏八月五日

要するに、久しくお目にかからないが、この手紙を見たら返事を書いてくれというのである。この短い手紙を苦心して読み終えた時の私の気持ちを人に理解して貰うことは、到底できないだろう。読み終ってしばらくの間、私は半ば放心状態で手紙を見詰めていた。思考能力は、ほとんど停止していた。

「こんな、ばかな……」

かなりの時間が過ぎてから、私はやっと独り言をいうだけのゆとりを取り戻した。

「あり得ないことだ」

私は、確かに芳町のいな吉という人物を知っている。正確には、知っていたというべきかもしれない。だが、いな吉から手紙が来るはずは絶対になかった。いな吉は、とうの昔にこの世を去った人なのだ。それに、私は、いな吉のことをただの一度も他人に話したことがないから、誰かのいたずらということもあり得ない。

ところが、そのあり得ないもの、いな吉の手紙が現に目の前にあるのだ。そう思っただけで見れば、筆跡も、間違いないいな吉のものであった。これをどう解釈すれば良いの

か、私には、全く見当もつかなかった。

しばらくの間茫然としていた私は、ふと、返事がほしいという以上、ほかに何か手掛かりになるものが入っているのではあるまいかと思いついて、封筒の中をのぞいて見た。案の定、底の方にもう一枚の紙が残っていて、封筒をさかさまにして机に打ちつけると出て来た。葉書ほどの大きさの上質紙を四つ折にしたもので、括げると、ボールペンで書いた短い手紙だった。こちらは、わかりやすい現代語だった。

『お心当りがありでしたら、中野駅南口へ今日の午後三時にお越し下さい。今日が無理なら、明日、明後日とやはり同じ場所と同じ時間にお待ち致します。』

九月三十日

速見様

どうやら、この手紙を書いた人物がすべての謎を握っているらしかった。すぐに机の上の時計を見ると、まだ二時前である。軽く食事をしても午後三時には充分間に合う時間だった。私は、この手紙をまとめて内ポケットに入れると、また部屋を出た。

今度はもう散歩どころではなかったから、真っ直ぐに最寄りのバス停まで歩き、バスで中野駅へ行った。駅前のそば屋で食事を済ませると、二時四十五分になったので、ひと息ついてからゆつくりと南口へ行った。空いている時間帯だったが、それでもなるべく乗降客の邪魔にならないように改札口の左の端で待つことにして、柵に寄りかかった。

会社勤めしていた頃は、渉外の仕事があったので、初対面の人と会うのには慣れていたが、今日ばかりは、一体どんな人物が現われるのか気になって、どうも落ちつかなかった。

私は、期待と不安のまじった複雑な気持ちで、それとなくあたりを見廻していた。空いているとはいえ日中の東京のことだから、人待ち顔の人も通り過ぎて行く人もかなり多い。私を呼出した人物がその中にいて、ひそかに様子をうかがっている可能性もあった。もしそうなら、あまり、きよろきよろしているところを見られたくないで、私は、駅前広場に視線を向けた。

「速見さんでござんすネ」

という歯切れの良い声が聞こえたのは、着いてから五分ぐらいたってからだった。その声は、後方左の斜め下

の方から聞こえた。私は、すぐに声の方を見た。柵の内側の改札口寄りの所に、白髪を引っ詰めて結った小柄なお婆さんが、私を見上げるようにして立っていた。

老人とのつき合いがあまりないため、見当がつけにくい、七十歳以上にはなっているだろうと思った。地味な着物を粹に着こなした勝ち気そうだが上品な人だった。

「はい。そうです。手紙を下さった方ですね」

私は、体ごと向き直って尋ねた。相手が高齢の女性だったので、安心すると同時に、かなり拍子抜けした気分だった。

「はい。池野ゆみと申します。手紙は、お読み頂いたでござんしょうネ」

強い下町なまりの早口である。

「もちろん。だから出て来たのです」

「ということは、いな吉姐あねさんをご存じでいらっしやる……」

「そうです。いな吉のことは、一日も忘れたことがありません。でも、なぜあなたがいな吉のことをご存じなのでしょう。ぼくは、これまでにいな吉のことを誰にも話したことがないから、知っている人がこの世にいるはずはな

いのです。なぜ、池野さん、とおっしゃいましたか、あなたがご存じなのか、どう考えてもわかりません」

まだ、駅の内側にいる池野ゆみに向かって、私は今までの疑問を一気に吐き出すようにいった。

「ちょっと、速見さん。今、そちらに出て行きますから」

池野ゆみは、困ったようにいうと、改札口で切符を渡して出て来た。

「あなたも相当せっかちなお方だネ」

「すみません。でも、問題が問題ですから……。とにかく、立ち話もできないので、その喫茶店にでも入りましょう」

「よろしゅうございますヨ」

ゆみがうなずくのを見て、私は先に立って歩き出した。駅のすぐ横のビルの二階が、小綺麗なレストラン兼喫茶店になっている。編集者に会う時しばしば使う店なのだ。横断歩道を渡って階段を登って行くと、池野ゆみは、しっかりした足取りで遅れることなくついて来た。

窓際の席に座って飲み物を注文すると、私は、このお婆さんの顔を見ながらいった。

「間違いないようにお尋ねしておきますが、池野さんの

おっしゃるいな吉は、何をしていて、今いくつぐらいの人ですか」

「ふふっ」

ゆみは、ふくみ笑いをしてから答えた。

「芳町の綺麗な芸者さんでござんしたヨ。もし今まで生きていれば、そう、百と八十にもなりますかねエ。それじゃ、今度はこちらからも伺いますけれど、あなたのご存じよりのいな吉さんとは、いつ、どこで知り合いになられましたかネ」

「忘れない文政五年に、深川の梅本という料理茶屋ではじめて会いました」

私は、池野ゆみの顔をじっと見詰めた。お婆さんは、うなずいた。

「それなら、間違いない。あなたこそ、あたしの探してた速見さんでござんすヨ」

池野ゆみは、懐から小さな紙片を取り出して、私の目の前で掲げて見せた。そこには、いな吉の筆跡で、文政五年三月八日 たつみ 梅本と書いてあった。指折り数えてみると、あれは確かに陰暦三月八日だった。しかし、なぜ、この人が……私は、腕組みをしながら尋ねた。

「一体、これはどういうことなんですか。どうして、あなたがいな吉をご存じなのか、いくら考えてもわかりません」

「何もそうお考えになるほどのことじゃないと思います  
がねエ」

ゆみは、私の顔を見詰めながらいった。

「この私にも、速見さんと同じ秘密があるといえはおわかりでしょ。あなたも他言なさりたくない、同じ秘密でござんすヨ」

「まさか」

「まさかといいたいののは、こちらも同様でござんすヨ。自分の同類がもう一人いるなんて、いくら信じろといわれたって、とても信じられるこっちゃござんせんものねエ」

「そうだったのか」

私は、いな吉の手紙を取り出しながら、つぶやいた。

今ゆみの言葉を聞いて、あり得ないと思っていた可能性がたった一つだけあったことにはじめて気づいたのだ。

池野ゆみという通り、私にはまだ誰にも、そう、妻の流子にさえ話したことの無い重大な一身上の秘密があった。

た。そして、もし、ゆみも同じ秘密のある身だとすれば、いな吉の手紙を届けてくれたとしても不思議はない。ただ、その可能性はあまり小さいので、私はこれまで考えてもみなかったのである。

「今度は、おわかりじやろ。あたしたちは、同類同士なんですヨ」

池野ゆみは、しわだらけの小さな口を一杯に開いて笑った。私は、その顔を見詰めながら、小声で尋ねた。

「つまり、池野さんも、あちらとこちらを行ったり来たりできるのですか」

「そうそう。その通り。もう、四十年もやってますヨ」  
ゆみは、うなずいてからいった。

「でも、速見さんは、今あちらへはいらっしゃれないのじやないかネ。それとも、何かわけがあつて行かないようにしていなさるのかエ。かれこれ二年ほどいな吉の所へ顔を出されんそうじやが」

私は、慄然としていった。

「行けるものなら、今、この瞬間にでも行きますよ」

窓から見える雑然とした中野駅前風景に重なる、重厚な土蔵造りの大店が数キロにわたって連なる大通りが、ふと目に浮かんだ。かつて、しばらく暮したこと

ある江戸日本橋の町並みである。

私は強い郷愁を感じて目を閉じた。また、いつの日にかあそこへ帰りたいと思った。

飲料が運ばれて来た。池野ゆみは、やせた手でスプーンをつまみ、ウインナコーヒ<sup>ー</sup>のクリームをかきまぜた。私も、トマトジュースに胡椒を入れて紙ストローでまぜた。

「速見さんは、おいくつかエ」

「もうすぐ、四十五です」

「はじめてあちらへいらしたのは、いつのこととござんすか」

「二年半ほど前ですが……」

私は、ストローをもてあそびながら、その時のことを思い出していた。

「随分いろいろな経験をして来たけれど、あんなに驚いたことはないなあ。いきなり、目の前の景色が二重写しみたいになったと思ったら、あつという間に見たこともない場所へ行ってしまったのだから。」

ただ戸惑うばかりで、何が何やらさっぱりわからないし、野次馬は集まって来るし、いやはや本当に参りましたね。そこがどうやら昔の江戸の町らしいことは、す

ぐにわかったけれど、わかったところで、なぜ過去の時代に転がり込んだのかさっぱりわからないし、もちろん、もとの世界に帰れるわけじゃないし、その恐ろしさとか細さといったらなかったですよ」

「わかりますヨ。あたしも、経験者でござんすからネ」  
池野ゆみは、ウインナコーヒ<sup>ー</sup>を飲みながらうなずいた。

「二年半前っていうと、今、あちらは文政七年だから、文政五年だったわけネ」

「そうです。文政五年の陰暦三月でした」

文政五年は西暦一八二二年である。

「いきなり転がり込んで、それからどうなりましたのじや」

「ぼくは運が良かったのですよ。野次馬に囲まれて困っていたら、丁度通りかかった親切なお医者さんが、自分の家へ連れて行ってくれましたね。」

しかも、知り合いの時計師に頼んで、ぼくの持っていた自動巻の腕時計を、もの好きな大金持に売ってくれたんです。おかげでちよつとした金持になったし、こちらへ帰れるようになるまでかなり快適に過ごせましたよ」

「ハハーン」

ゆみは、にやりと笑った。

「そのお金で、いな吉姐さんを深川から身請けしたというわけネ」

「とんでもない」

私は、苦笑しながら手をふった。

「身請けしたのは、いな吉と一緒に暮しているおこま姐さんの方で、いな吉は、もともと自前芸者ですよ。深川では中嶋屋の看板借りて出ていたから、できれば独立したいというもので、実家のそばの芳町にあの家を借りてやっただけです。」

おこま姐さんを身請けしたのは、いな吉があの人の後見して貰って芸者を続けたといったからで、ぼくが何かしようと思つたわけじゃありません」

池野ゆみは、大きくうなずいた。

「ああ、あの人がそうなのかエ。あたしは、最初、おこま姐さんの方が抱え主かと思つていたけれど、それにしちゃちよつと変だから、どういう間柄かと思つていましたヨ。それで、合点が行きました」

「なんでも、おこま姐さんは、いな吉がかげだしの頃、親身に面倒を見てくれた姉さん芸者で、あの商売の裏表

に通じているらしいから、自分が抱えの芸者みたいな形で、マネージャーをして貰っているのですよ」

「なるほど。そういう話の筋でござんしたか」

ゆみは、納得したようにいった。

「あの妓には、どうも普通の芸者らしくないところがあるもので、不思議だと思つていたけれど、今の話でよくわかりましたヨ。」

でも、どうやら、あの妓は、いつまでも、お前さん一人を守つて待つ氣らしいから、せめて、手紙ぐらい書いてやつておくんないかい。あたしや、いな吉姐さんがいじらしくてならないから、こうやつてわざわざ速見さんを探し出してやつて来たのじやから」

片時も忘れたことのない、いな吉の黒い円な瞳と、丸ぼちやの愛くるしい笑顔が、いつにも増してはつきりと目に浮かんた。私は、それをより一層はつきり見ようとして目を閉じると、深い溜息をついていった。

「手紙を書くどころか、さつきもいったように、行けるものなら今すぐにも行つてやりたいけれど、今のぼくにはどうにもならないもので……」

「跳べなくなつて、二年だとおいいだったネ」

コーヒを大事そうにすすると、池野ゆみは、やや上